

日本プロレタリア文学集・11



ロレタリア文学集・11

芸戦線作家集 2

日本プロレタリア文学集・11

「文芸戦線」作家集(二)

定価 二六〇〇円

一九八五年十二月二十五日 初版©

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三三〇一七一
振替 東京 三一 三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・11

「文芸戦線」作家集

(一)

目次

鶴田知也

海鳴り……………九

牧場を逐われて……………二四

シベリアから返って来た手紙……………三

闇の怒……………三

或る農夫の話……………九

山本勝治

十姉妹……………八

員章を打つ……………一四

前田河広一郎

セムガ(鮭)……………一三五

アトランテック丸……………一六九

今野賢三

処女地……………一八三

犬田 卯

土に生く……………二二一

開 墾……………二二七

黙せる魂……………二三四

解放された農奴……………二四七

佐左木 俊郎

芋……………三九

駢落 三三

熊の出る開墾地 四二

黒い地帯 三五

都会地図の膨脹 三七

飯田豊二

祭の夜 六七

銅像になった將軍と馬 三九

解 説 津 田 孝 三九

発表年月日と掲載文献 四二

鶴
田
知
也

海鳴り

一

十月の、北海道の夜が、煙霧に被われたまま、とつぷり暮れていた。

村から海までは、八哩以上あった。海鳴りは、しかし、鮮かに轟いていた。それは、狂奔するという轟きではなく、（私の思いなしに）秩序立った、堂々たる大群集の鯨波のように聞えた。腹腸にこたえる轟きであった。

私の周囲には、ひそまり返った二十七人の若い農夫達が、その海鳴りを聴いていた。

そうだ——、私は、あの忘れられぬ一夜の思い出を、順序立てて話して試ることにしよう。

どんなに北海道の道路が悪いとは云え、（恐しく悪いんだが）十勝の国から、函館の港まで、徒歩で五十日とかかる筈はないのだ。処が、私は、それに丸る三年を費した。三度あの賑かな虎杖の花が咲き、三度それは真黒に枯れた私が徒歩旅行者でなかった、というのが、その誤算の理由なのだ。三年なら、文句なしに良い方だとしなければならぬ。笑い事じゃないんだ。私だとて、彼等と——永久に『内地』の土を踏めない彼等と、仲良く抱き合つて、鉄道の、堤防基礎工事のセメント樽や土俵の中に曲げ込まれるような浮目を、危く見る所だったんだ。

今こそ暢気に、こんな思い出話などを書いてゐる私が、捨て身になつて、鶴嘴を『鬼』の横つ腹に打ち込もうと、本氣に決心したのだった。だが、私の実行の前に、（もう時効にかかつてゐるから云うのだが）仲間の武藤が、その岩田某という棒頭を撲殺した。訳はなかったそうだ。そこで彼は、死人の両脚を轆轤みたいな風に引っ張つて、死体を崖の縁から、吹溜の雪の中へ蹴込んだ。其処は死んだ人間でない限り、夏でも一寸行く気になれぬ場所であった。

私達は、春を待つて逃走した。『何処で死んだって、此処で活きるよりは増だ——』と私達は考えたのであった。『運よくいけば、俺達は内地に入るかも知れないし、よ

し死ぬにしても、一足でも内地の方へ近よってからにしよう……。』

それは、一旦『内地』に愛相をつかし——云い代えれば、愛相を尽されて、そこを見捨てて出て来た私達の、心からの胸の衷であつたんだ。理屈なしに『内地』は母であつた。少くとも私達には、絶えず仲間達を豚よりも下劣な生活の中へ蹴込み、無慈悲な歯を噛み鳴らしては幾万の失業者を街頭に逐い出している猛獣日本ではなかつたんだ。それは、只だの母であつた。

極端な困憊と、性慾よりも強いセンチメンタリズムとが、私達を無批判にし、空想的にさえし勝ちであつた。だから路で拾つた菓子的一片も、天よりのマナと思われたし、顔は、何時襲いかかつて来るかも知れぬ最後の為に狂暴な形相になっているとは云い条、心は、ヒステリー女よりも涙脆かつた。

私達は、二人で一緒に『旅行』する危険をもよく承知していた。併し、承知して居れば居る程、そのことに話を触れまいと努めた。私達は、ロシアの動物学者が云つたような、動物的な絆に繋がれて、肩を打ち合せながら、胆振の国のある小村に入つたのである。

私達は、村に入る前に、峠の上に立停つた。云い合せで

もしたように。

樹木や雑草は、深か緑の大浪であつた。それは七月のあの北海道の太陽の下で、潑刺と躍つて押寄せ、小村を呑み込もうとしているかに見えた。鶉公が、落葉松の林の中で鳴いていた。方々に、木っ葉茸の屋根がチラチラ輝き、一際高い教会堂の、白木の十字架の上には、鴉が二羽とまっていた。遙かの台地の上には牧場があつた。

『町も近いんだぜ——』と、武藤は私の肩に手をかけて云つた。そして、惨めに涙をすすつた。

私は、黙り込んで、台地の上のエアーシャ種の乳牛達を眺め入っていた。それは、芝草の上に散つた桜の花弁そっくりに鮮かであつた。私も胸は一ぱいであつた。そして、負けず劣らず惨めに涙をすすつて、それを飲み下した。『もう大丈夫だ！』それと又『何か、そこに良い事があるに違いない！』これが私の胸を、手拭を絞るように絞つた。すると突然、武藤は云つた。

『教会が、あそこに、あるじゃないか。』

そして、彼の手は、私の肩を強く掴んで震え出したのである。

私は、ぎくりとした。顔色が変わつたに違ひなかつた。私は振り向いた。

「武藤！ いいか、俺が共犯だってえことを忘れるなよ！」恐しく干涸^{かわ}びた声で私は云ったが、相手を突放して、吃^くり出した。「俺達ア、な、何の爲めに、此処まで逃げ出して来たんだ。考えて見ろ。畜生！ 貴様ア、貴様ア——違法もねえ出来損^いいだ！」

「そうじゃ、ないんだ。僕は、今になって告白するんだが……」

「聞き度くもねえ！ 告白とぬかしやがる！」と私は、崖から跳び降りたような勢を、そして加速度を得つつ叫んだ。「お前の、その宗教癖が、何もかも、おじやんにしつ終わあ！ 勝手にしやがれ。俺達ア『鬼』をばらした。お前は、此処まで来る間にも、一足一足、血の着いた手のことを想い出し想い出し歩いていったんだ。馬鹿野郎！ ばらさなきアばら、されらア！ お前なんざ、ばらされアそれで丁度よかったんだい、死損^いい奴！」

「そうじゃないんだよ。」と彼は、私の腕を掴んでそれを振りながら叫んだ。

「お前が下手人だ！」と私は相手を『穿^すげる程』睨めつけて喚いた。「俺は共犯者だ。だが、今となれア、俺も腹が決った。断じて俺は下手人だ。お前は共犯者なりと、赤の他人なりと、成り度い方に成りアがれ！ ええい、近寄る

な。打ち殺すぞ！」

「僕の告白は、そんなことじゃないんだよ。」

「下らねえ胡麻化しなんぞ廃せ！」と私は足を踏張^ふって叫んだ。「お前は、大学まで行つた。お前は、俺に色んなことを教えた。畜生、大学なんぞ糞食^くえだ！ お前はそこで、高々身の破滅に役に立つ学問をしたんだ。お前の学問も、お前の良心も、一緒くた豚に食われろ！ さあ、教会へなりと警察へなりと失せやがれ！ 俺ア云つとくが、こうなつた上は断じて俺が下手人だ。お前なんぞから、俺をぶつ壊されて、プロレタリアの顔が立つかい！ 糞^くいまいましい！」

「僕が云い度いのは——」

「黙れ！」

「君は見当違いをしてるんだよ！」

「黙れつたら！ もうお前の理屈で、こうなつた上は胡麻化されやしねえ。文句があるなら、俺ア腕でいく！」

突然、武藤は、悲鳴をあげて私に跳びついて来た。私は、組つかれる前に、両腕で払って、のめる彼を突放した。彼は、熊笹の繁みの中へ、蛙そっくりの恰好に飛び込んだ。藪が、音を立てて折れて彼に被^かさつた。熊笹は、吊床のよう、彼を受けた。

「そうだよ、ああ蹴飛ばして呉れ！」と彼は、吊床の上で、忽ち私の方へ寝返りをうち、大急ぎで路を脱ぎながら云った。彼は、本統に泣いていた。「僕は、もっと、もっと、蹴飛ばされていい奴だ！　どうか、赦して呉れ！　僕は——君を、三度までも、後からすんでのことに撲り殺そうとしたんだよ。三度までもすんでのことに——」

鶉公が、遠くで、カックウと鳴いていた。私は、それを瞭然り覚えている。そして又、その時、何故だか、急に私が真赧になって終ったこと等も。

やがて、私達は肩を打ち合せながら、小村へ入って行ったのである。

二

北海道の農民達が、浮浪人を怖れることは甚しい。『残酷な浮浪人』の幾多の物語を、彼等は持っている。果して浮浪人（主として監獄部屋から脱走して来た者）が、豹（ひょう）であらうか？

樺太へ逃げなければ立行けぬ極貧の農夫、奪われる何物をも持たぬ彼等でさえ頭を振りながら、熊よりも怖しい浮浪人の物語を話すのだ。

何方に一態、罪があるのか？

「細々しい説明の必要はないさ——」と、ずっと後になつて、武藤は、この事に就いて私に話した。彼の言葉によればこうであつた。「我々の圧倒的な力が獲得する勝利。これが、我々を極貧にもせず、浮浪者にもしないだろう。そして『残酷』は、我々の勝利に対する絶望的な、だが、激しい抗争が起る時にばかり起るだろう。丁度、汽車に向つて、身を打ちつける場合に起るようにな。それア汽車の知つたことじゃないさ。」

私には私で、他にもっと云い方もあるのだが、武藤は、確かに、私などよりも人道的な物の云い方を知っていたのは事実である。

扱て私達には、素晴らしい幸運が待ち受けて居た。私は牧場に口を見つけ、武藤は、可成にやっている農夫の家に住み込めることになった。農夫は、金造と云つた。彼は若くて何時もにこにこしている男であつた。

私達は、いや私は、そこに二年近くを暮すようなことになったのだ。

武藤は、私達の幸運に就いて、どんなに度々、自分の手を自慢したことだろう。私も一言もなかった。

一口で云えば、武藤は、ジャンバルジャンに暗示を受け

たものらしい。彼は、私から突飛ばされた故か、跛を曳きながら、あの坂の上から見えた、十字架の横木に鴉のとまっていた教会に入って行った。私は、併しもう彼を疑いはしなかった。

教会には、度の強い近眼鏡をかけた若いミリエル僧正が居た。僧正の部屋には、ミレーの『晩鐘』の代りに、ゴッホの『向日葵』の版画が掛けていた。

若い、神学校を出て問のないメソジスト派のこの僧正が、自転車で駆け廻って、丸る五日の後に、夫々私達の身の振り方をつけて呉れたのだった。

序だから云って置くが、ジャンバルジャンだのゴッホ（忘れもしない、正しくはヴィンセント・ファン・ゴッホだ。ジャン・フランソア・ミレー。——）だのは、武藤が、彼の『手並』を自慢する度に、教えて呉れた所のものなのである。実際彼は、其の他の沢山のことを私に教えて呉れたものだった。

日が経った。

私は毎朝早く二十頭からの牝牛達を、牧場に連れ込む為めに掛けた。私は先頭の牛に跨った。そしてアカシヤの並木の下を通る時には身をかがめて口笛を吹いた。牧草を刈ったり、牧舎の掃除をしたり、フォークで堆肥を積み上

げたり、或は又、デントコーンの種蒔の為に、カルチベーターを操ったりして暮した。

牧場主夫妻は、基督教徒で、良人は瘦せて黄色く、妻君よりは七貫匁は軽かった。

三人の牧夫が居た。併しながら、彼等は、話す価値のない意気地無し、女の話をするれば顔を赧らめるといふ代物揃いであった。私は、胸に傷持つ悲しさから、自分、意気地無しの牧夫達の封建的に憤慨しながらも、至極忠実に、とりも直さず搾取に甘じて働いたのだ。所がどうだ、世界の何処にだって、仲間居るんだ！

私には、若い農夫の友達が多勢出来た。武藤の住み込んだ家の主人金造は、『北海タイムス』と『小樽日々新聞』をとっていて、彼は、村の顔役であった。彼と私とは、馬鹿に気が合って、よく飲んだものである。

三

私達、いや（後に話すが）私が、二年近くも、あの有名な、伯爵の農場の小村に身を寄せていられたのも、全く、若い農夫達の為めなのであった。

武藤の人氣は凄いものだった。毎夜、彼の周囲には若い

仲間が集まつて来て、彼に話をさせた。彼は、欧州大戦の話だの、電気や蓄音機の話だのをした。彼等の或る者は突然、『オウロラとは何のことか?』とか、『西洋人には六つ乳があるそうだが、あれア本統か?』とか等の質問を出したものであった。そして或る者は、追分や浪花節を唄った。しかし、彼等の最も好んだものは、私達自身が恋がれている『内地』の話なのであった。村には、若い主人が多かった。北海道第一期移住者の子供の代になっていたのである。従つて、彼等は、『内地』を知らなかった。

私は、彼等の生活を見た。『死の谷』から逃走して来た私達にとつて、極楽であるべきその、惨たんなる生活を見た。そこで私は、根気のいい探索から、農夫達の収穫、生活費や小作料、肥料代其他から割出して、何故、彼等が赤い斑点のくつついたラングン米だの、ぼろぼろの玉蜀黍飯を食つていねばならないかを、指摘せずには居られなかった。彼等の日当は、清算すれば良くて十二三銭から二十銭見当にしかあたらなないじゃないか。冗談じゃない、朝鮮の立ん棒だつて辛抱能きる条台のものじゃあるまい。

私のこの調査は、農場主の伯爵が、毎冬行ふ熊狩の『壮拳』の話の後だつたために、一入、多大の感銘を呼び起した。

私は、頃合の Copp 加減も手伝つて、恐しく流暢に説いた。だから、武藤はその翌日私の所へ、『煽動しては駄目だ我々の生命が危いじゃないか云々』だけを云う為めにやつて来た程である。私は牛舎の掃除をしていて、時宛かもその重大事に就いて画策をめぐらしている最中であつたのだ。

「俺達の? ふん。生命が危いだと?」私はフォークをせいにして昂然と云つた。

「いや、その、君の、君の、その気持はそれやよく判つてるんだよ。だが——」

「だが何だ? こうなれア『内地』なんぞ糞喰えだ。俺ア死んだつてやるよ。」と私は、フォークを牧舎の板敷の上に突きさして云つた。

「僕だつて、やるとなれア、そらあやるさ。だが——」

「だが何だ? と俺は訊いてるんだ。」

「そう、君、昂奮しちゃ話が能きない。」と、武藤は、群つて来る蠅を追い払いながら云つた。

「云つとくがな。」と、矢張りその、一応落着く為めに咳払いをしてから私は続けた。「これに昂奮しなかつたら、俺達アお終いだぜ! お前の生命なんぞ、捨て甲斐があると云うもんだぞ。」